

# 平成二十九年年度 小論文試験

受験番号

氏名

次の文章を読み、問いに答えなさい。

排水ポンプの横につくられた仮設テントのなかで、アンナさんは次のように挨拶を述べた。  
「私たちのホスピスは、がんの進行あるいは末期の患者で、家での十分な介護を受けられない人々のための小さな滞在施設です。ここでの療養および治療はすべて無償です。家庭の事情で一人残された患者、どうしても病院で引き受けてもらえない患者を受け入れます。強調したいのは、この家は病院の延長ではないということです。まして病院の代わりをするところではありません。余命を受け入れた患者にとってこの場所が、わが家のような終の家になることを目指します」。

その後「アドヴァル」から発行された季刊報『アミーチ』（仲間たち）のなかに載った彼女の言葉が今もはつきりと記憶に残っている。「このホスピスの完成のあかつきには、文化的、教育的活動にも力を注いでゆきたいと考えています。ここは患者とその家族、医師、看護師そして私たちボランティアが、誰にも等しく訪れる死を通して成長する場所です。ここは、様々な体験と知識をもった人々が、人間の命の尊さについて互いに教え、学び、生き甲斐をもらうところです」。

この「命の尊厳の家」というホスピスが、単なる終末期の患者や引き取り手のない老人の、いわゆる公共施設ではないということはいまでもない。極まった状況にありながらも、最期まで人生の学びを続けたい、残されたわずかな時間であっても「生き直したい」、「生まれ変わりたい」と願う人のための場なのである。そのとき初めて彼女が思い描くホスピスが、それまで私が関わってきた芸術教育とどこか深いところにつながった。

これからのアートにとって根本的な指針を与え、すべての創造活動の原点にある何かに気づかせてくれるところとしてのホスピス。そうだ、ここは人生という作品を仕上げるところであり、「アーティスト」としての夢を叶える最後のチャンスを用意してくれているのだ、という思いを胸に刻むことになった。

その後、美大でデザインやアートについて教えるかたわら、できるかぎり学生たちと一緒に、定期的に国内外のホスピス訪問を続けた。そのあいだに、芸術家の卵たちが死を身近に感じることは、創作活動などという以前に、彼らの感性の日常として不可欠なものではないだろうか。考えるようになった。生に劣らず死への畏怖と共鳴の回路を詰まらせないことが、表現やコミュニケーションを生業とするものにとって大前提となる才能ではないのか。限りある命を愛おしみ、一刻もおろそかにしないホスピスに流れる時間のほうが、美大のアトリエよりもずっと濃密で創造的に思われた。泉のように湧き出る空想より、バケツの底を飽かず眺め続ける想像力のほうが、より深く人生の真実に突き当たる才能と呼べるのではないのか。

（横川善正著『ホスピスからの贈り物』ちくま書店）

問一 この文章に、あなたが考えた題名を20字以内でつけなさい。

問二 著者は、芸術家の学生がホスピス訪問において、ホスピスのどのような面からどのようなことを感じ取ってほしいと考えているのでしょうか。100字以内にとめなさい。

問三 将来医師になり、終末期の患者を担当するようになった場合、どの様なこと（複数でも構いません）を大切にしたいと患者と接したいと思いますか。350字、400字以内で記載してください。

